

傘寿談議

還暦・古希・喜寿そして

徳島剣山世界農業遺産支援協議会 会長

永井 英彰

「満八十歳・健康」はめでたい

沖縄・宮古島でもカヤ敷農法

九十歳何がめでたい

今月号が最終執筆となる。二十年間、毎月書いてきたのでこれが最後と思うと「何を題材にしようか」と迷う。新聞広告で「九十歳、何がめでたい」という本を見つけた。筆者は今年一月で満八十歳を元気に迎えることができ

「めだたい」と思っているのに、九十歳まで元気なら結構なことでないかと、瞬間的に反発した。早速、購入した。著者はサトウハチローの妹佐藤愛子さん(九十三歳)で、この本は四十六万部を突破しているという。

読んでみるとどの章も面白い。お終いにこんなことが書かれていた。

「ああ、長生きするということとは、全く面倒くさいことだ。耳だけじゃない。眼も悪い。終始、涙が滲み出て目尻目頭のジクジクが止まらない。膝からは時々力が抜けてよ



洞窟の泡盛貯蔵庫



サトウキビの焼き畑と根間玄治さん



サトウキビを敷いた畑



宮古太布(宮古島博物館で)



慰霊塔・豊旗之塔へ献花



沖縄最大の米軍空港嘉手納基地

ろめく。脳ミソも減ってきた。そのうち歯も抜けるだろう。なのに私はまだ生きている。ものいわぬ婆アとなりて春暮るる」

おしまいの言葉で佐藤さんは次のように言う。

「のんびり」の毎日では、起きてても別にすることもなし。仕事をやめれば訪ねて来る人も途絶える。そんな時に「女性セブン」から週刊誌エッセイ連載の依頼があった。

依頼を引き受ける時「九十歳 何がめでたい」が閃いた、ヤケクソがこもっているという。隔週連載が始まって

何週間が過ぎたある日、気がついたら私は老人性ウツ病から抜け出ていた。人間は「のんびりしよう」なんて考えてはダメだという事が九十歳を過ぎてよくわかった」と結んでいる。

筆者は題名に反発して本を買い反論を書くこうと考えて読んでみると、それは人生賛歌の内容だった。題名で読者を引き付け、筆者も読まれたのだから、「参りました」と脱帽である。この本は「九十歳はめでたい」という内容の著書だった。筆者は満八十歳を迎えることができ、やっと比喩が理解できた。

上品で綺麗な日本語

兼高かおるさん(八十八歳)が今年二月、産経新聞に「話の肖像画」として、五回の連載をされた。番組が始まったのは昭和三十四(一九五九)年、筆者が大学を卒業し徳島新聞社編集局へ就職できた年だった。

四回目ので、「日本の良さが失われていく」と題して「特に若いひとたちのマナーには眉をひそめなくなる」とがある。家庭もダメ、教育もダメ、とりわけ家庭が大事です。日本人の良さは家庭で培われるものですから」と述べている。

「最近の若者はチャレンジャーや冒険を嫌い、安定志向だけが強い。海外旅行に行きたがらず、留学生も減っている」との問いに、次のように答える。日本人としての基本は衣食住にあるが、豊かになり過ぎたのか、いまやそれがあつて当

たり前、大切さを忘れている。日本でこんな便利で快適な生活をしているのに、なぜ、わざわざ苦勞をしに外国へ行かねばならないのかと思うのでしょね。インターネットさえあれば、日本も外国もない、すべて事足りるというのですか？それでは「自分を育てる」ことはできない。日本人の知的好奇心はどこへ行つてしまったか？資源もない島国で、いざ、地球上に問題が起きたとき誰が助けてくれるのか？

筆者も全く同感である。筆者が気軽に海外へ出掛けると、知的好奇心を満たすためです。そのためなら出費は厭わない。

宮古島でカヤ敷農法

二月3～6日まで「阿波を盛り上げる泡盛の会」の二十三人と二緒に沖縄・宮古島へ旅行した。宮古島は那覇から西南に二百九十キロにあ

り、サンゴ礁と琉球石灰岩からなる台地の島で全般に平坦である。最高地点で百十五メートル、川らしい川もない。昭和四十六年、半年の大干ばつの後に地下ダムの建設に着手し、昭和六十二年、二千四百万トンの水源を確保した。この水は上水道の他、八千四百ヘクタールの畑地灌漑に使われている。

私達はまず泡盛蔵元の多良川の洞窟貯蔵庫へ入り、瓶に入れて十年以上寝させる様子を見学した。翌日は徳島県人部隊の眠る「豊旗の塔」へ行き沖繩戦で戦死した人たちを慰霊した。

筆者はこれからタクシーで単独行動を取り、宮古島市総合博物館へ行った。カヤヤススキに似た同じイネ科のサトウキビと、徳島にもある「高里」姓のルーツが宮古島と聞いてその確認のためだった。高里姓について学芸員からそれらしい地区が「新城・



横浜中華街の聘珍樓(上)と前菜(下)



がんこ二条苑(角倉了以邸跡)(上)と小堀遠州作の庭園(中)と料理(下)



高瀬川の源流と高瀬舟



伊藤若冲展の開された相国寺

城辺にある」と聞いたが、時間不足で突き止めることはできなかった。

サトウキビについてはタクシー運転手の根間玄治さんが「自分もサトウキビ農家だ」と、親切にも自宅へ案内してくれた。宮古島ではヘクタールかそれ以上の規模の農家が多い。地下水が豊富なので生育は申し分が無い。棒状にして製糖工場に運ぶが、穂先や葉は畑に残す。カヤ敷にしている畑もあり、訪問先は更に焼畑にしていた。製糖工場で出た搾りかすは燃料にするとの事だが、この燃料はバイオ燃料のことであろう。刈り取りの機械が見たいと頼み、作業現場へ案内してもらった。

沖繩本島では南城市の糸数アブラガマという深い縦の洞窟で終戦を迎えた兵士達の苦労の後を偲んだ。続いて世界遺産の斎場御嶽を訪

ね、琉球信仰の一端に触れることができた。琉球藍の本場を訪問したかったのだが、こは「北部」という本島北部の町にあり、先方の了解が取れず行けなかった。

横浜中華街で舌鼓

旧友の眉山天神社宮司・滝本彰さんが四月二十六日に、東京帝国ホテルで傘寿の宴を開く。二月十三日、その夜は横浜・中華街近くのホテルに泊まり、中華街では聘珍樓で薬膳料理を楽しんだ。翌朝は港や港の見える丘公園を散策していたら大佛次郎記念館を見つけた。開館前だったのでその足で東京上野の西洋美術館を目指した。しかし、月曜は休館日であることに気付き、六本木の国立美術館へ行った。草間彌生の看板が目についたが、まだ準備中で空振り。仕方なく

近くの森ビルに回った。幸い「マリー・アントワネット展をやっており、こちらへ並んだが、同じ新美術館から流れてきた来館者が多く、二時間以上待たされた。館内も芋漕ぎ状態で航空機の搭乗時間を気にしながらの気忙しい拝観となった。

三好長慶の墓にお参り

二月十九日、四国大学の研修旅行があり、四十人で京都へ出掛けた。大徳寺塔頭の龍源院、瑞峯院を回り、お目当ての聚光院へ行った。戦国の天下人・三好長慶の菩提寺で、何度も訪問している。国宝である狩野永徳・松栄の障壁画は拝見しているが、平成二十五年に落慶の書院へ千住博画伯が描いた大作「滝」は初めて拝見した。鮮やかな群青や真っ白な滝が浮かび上がる構想は将来の国宝級である。和尚にお願いをして、

庭の長慶と千利休の墓へお参りをさせてもらった。

「がんこ高瀬川二条苑」で昼食を取ったが、こは江戸時代の豪商・角倉了以が高瀬川を開削しその源流に建設した別邸跡にある。庭園の一角には小堀遠州作の茶庭も現存し素晴らしい。上京区にある禅寺・相国寺では承天閣美術館で「伊藤若冲」で「鸚鵡牡丹図」などを拝見した。

田中省造先生の案内で、室町幕府のあった位置へ案内してもらった。なんと、同志社大学の辺りで、ついでに構内を散歩させてもらった。

春日の野菜品質上々

春日実験田のカリフラワール・ロマネスコについて岡部産業へ依頼していた成分分析の結果が得られた。それによると一般流通品と比べて、糖度とビタミンCが高く、抗酸化力は並みだが硫酸イオンは

極端に低いことが分った。総合評価は5段階中4で、上々の成績だと褒められた。ビギナーズラックであらう。

徳島を元気に

徳島新聞の広告五段分を（株）丁井が使い、毎月一回、「近江源氏が鳴門に住み着いた経緯」や「堂浦の釣り具開発」などの記事を掲載しようというもの。平成二十二年秋から二年間、宇和島町吉田に進出した丁井俊社長が愛工房（株）をスタートした時、吉田の町を元気にする記事を書いてという依頼を受け「みかんの里 吉田ぶらり旅」を執筆、出版もしている。良い題名が浮かんでいたのに忘れてしまい、思い出せずに困っている。

論文は今月提出



室町幕府跡を示す石柱(右)と同志社大学(左)

三月末が締め切りの四国大学向け「剣山系の傾斜地農業」関連の論文（同大上野昇講師と共同執筆）は、四百字詰原稿用紙四十枚の本文はできた。四国大学図書館や北島町図書館を訪ね木屋平村誌など、各地の草農法を確認しているが、焼畑やカヤ敷などの農法に触れている記述は以外と少ない。余りにも当たり前すぎるからか。後は今月ネパールへ調査旅行に行き、ヒマラヤ山脈を挟んだチベットとの農作物の違い、土壌、桜の原産地の面影などを探して一項目書けば仕上がる。写真は百枚位を貼り付ける予定で整理中である。

県西二市二町は剣山系の世界農業遺産と今回新設された「日本農業遺産」の認定をめざし、農林水産省に申請書を提出していたが、一次審査を通過している。いずれも三月中に結果が出る。このような時期に合わせて剣山系の傾斜地農業関連で、四国大学へ論文提出の機会を与えてくれたことにに対し、心から感謝している。

子育てが終わると

筆者は中学生の頃はつらつとした同級生を見初めて、就職の翌年結婚まで漕ぎつけた。これは人生最大の成果だったと思っ

ているが、共に八十歳となった最近はずっと様子が違ってきた。子供が一人前となって、妻の世話を焼く分野が減り、矛先が筆者に向けられるようになり、何かにつけて小言をいう。「洗面器が汚いので掃除した」「部屋の暖房が付けっぱなしだった」「別々のトイレだが、汚れていた」「夕食が要らないなら前もって連絡して」「頭はもつと洗わないと臭くなる」「下着は靴下だけでなく毎日洗濯に出して」等々キリがない。子育ての最中とは違って色々注文を付けられても、さてという心境である。聞き流しているが、とにかく元気でいてくれないと、筆者も好きなことが続けられなくなる。妻に倒れたら「ちよっとネパ

健康法を訊かれるが

ールへ行ってくるけんな」という事は出来ない。妻のジャズダンスは健康の秘訣のようなので、続けてもらうことが一番だと悟った。願わくば筆者より長生きをして、後の始末をして欲しい。

筆者は毎日近くの愛夢豆という北島町内の喫茶店へ歩いて通う。自宅の応接室代わりに使っている訪問客ともここで会う。散歩は一日一万歩。朝晩は日本ハチミツを舐めて喉を殺菌している。若い人達に誘われればどこへでも行く。日記は毎日欠かさず書き物忘れを防いでいる。風呂に入れば腱引き筋を指圧し、全身をマッサージしている。風呂の中で、機嫌が良ければ手足がポキポキ鳴る事もある。オムロンの測定器によると、健康年齢は五十五歳位。八時間は睡眠を取りストレスは溜めない。好奇心が旺盛で、どこへでも出かける。常備薬は緑内障治療の目薬と血圧を下げる一錠、膝の痛み予防の健康食品

二月、トマトに花

位。健康保険証は極力使わないようにしている。二十年にわたって本誌の原稿を書かせてもらった事も頭の体操になり、出歩いきつかけともなり、これも元気の源の一つであった事は確かである。

今年は一月に積雪が無かった。お陰で狭庭のトマトが花を二月に咲かせた。トマトは厳しい環境に育つほど味が良くなるという。枯れてしまえばどうしようもないので、根元にカヤを敷き保温に勤めていた。青いがそれなりに大きくなった実は収穫して干乾しにしておいたところ、皮をむくと中は赤い。妻はそれをサラダに使ってくれる。庭で採れたというだけで文句なしに美味い。



2月に花を付けたトマト

長い間お付き合い頂きありがとうございました。読者の皆様にお礼申し上げます。ありがとうございます。